

一 桐壺①（いづれの御時にか）	4
二 桐壺②（野分だちて）	9
三 桐壺③（御文奉る）	13
四 桐壺④（命婦は、まだ大殿籠らせ給はざりけると）	17
五 帝木①（つれづれと降り暮らして）	22
六 帝木②（『女の、これはしもと、難つくまじきは）	25
七 帝木③（「すべて、男も女も、わろ者は）	29
八 夕顔①（御車も、いたくやつし給へり）	33
九 夕顔②（八月十五夜、限なき月影）	35
一〇 若紫①（瘧病にわづらひ給ひて）	39
一一 若紫②（尼君、髪をかき撫でつつ）	42
一二 賢木（はるけき野辺を、分け入り給ふより）	46
一三 須磨①（須磨には、いとど心づくしの秋風に）	50
一四 須磨②（前栽の花、いろいろ咲き乱れ）	54
一五 明石（ひねもすに、いりもみつる雷の騒ぎに）	58
一六 総合（夜明け方、近くなる程に）	62
一七 薄雲（冬になりゆくままで、桂の住まひ）	65
一八 朝顔（雪の、いたう降り積もりたる上に）	68
一九 少女（「ただ今、かう、あながちにしも）	72
二〇 玉鬘（母君の御行く方を知らむ」と）	75
二一 蛹①（長雨、例の年よりもいたくして）	78
二二 蛹②（その人の上とて、有りのままに）	83
二三 常夏（いと暑き日、東の釣殿に）	87
二四 野分（人々、参りて）	92
二五 夕霧（九月十余日、野山の気色は）	96
二六 御法（風、すぐく吹き出でたる夕暮れに）	100
二七 匂兵部卿（昔、光君と聞こえは）	105
二八 橋姫①（秋の末つ方、四季にあててし給ふ）	109
二九 橋姫②（あなたに通ふべかめる透垣の戸を）	113
三〇 椎本（雪・霰、降りしく頃は）	118
三一 総角（雪の、かきくらし降る日）	123
三二 浮舟（男は、過ぎにし方のあはれをも）	126
三三 夢浮橋（主ぞ、この君に、物語）	130

☆この本を使用するにあたって

『源氏物語』の内容と備値

『源氏物語』は、全編五十四帖、登場人物数百人、主要人物だけで
も三十人以上、前後七十年の長きにわたる雄大なものである。第一部
において源氏の青春の華やかな生活が、第二部においては人生の
苦悩と死とが語られ、第二部では薫の憂鬱に満ちた生活が語られて
いる。そして、全編を通じて流れているものは、「宿世」の思想で
あり、「もののあはれ」の理念である。すなわち、人間世界のあら
ゆることは、宿命として定まっているので、それは人間の方では
どうすることもできないものである。だから、たとえどのような罪
や過ちを犯そうとも、その人間を哀れみこそされ、少しも憎むこと
はできないのである。これこそが、人間の真の姿であり、人生の相
なのである。作者は、こういう思想に基づいて、直接見聞した當時
の宫廷を中心とする貴族生活を舞台に、光源氏を主人公として平安
朝的情趣の世界を描き出したのである。これこそが王朝文学の
精粹であり、他の追随を許さぬものがある。

入試問題としての『源氏物語』

また、毎年の大学入試問題を見ると、『源氏物語』は、常にトップ
の座を占め、他の古典を大きく引き離している。文章が長いものであること、(2)主語の省略が多く、述語のない
文もかなりあること、(3)精密を極めた敬語法によつて語られている
こと、(4)典型的古語の多いこと、(5)風景描写、心理描写の巧みさ、
などにより古語解説力をテストするに最も都合の良いものだから
である。これが完全に理解できる力があれば、他の古典は試さずと
もその力の程が分かるのである。

『源氏物語』のどこを読むべきか

それなら、いつのどのように学習したら良いのであるか。

『源氏物語』五十四帖、すべてを読むにこしたことはないが、なに
ぶんにも大部なものであるから、これを要求することは無理である。

そこで本書は、過去の大学入試問題を検討して、頻度の高いものか
ら優先的に採り、次に内容の深いもの、文法上特に重要な用例を含
んでいるもの、重要語句の多いものなどに注意を払つて決定した。

『源氏物語』のどこを読むべきか
さて本書をいかに利用するか。

1. 各巻のはじめにある梗概を熟読すること。梗概は簡単ではある
が、通読すれば省略した巻も含めて、『源氏物語』全編の概略が
分かるようになつてゐる。あらすじを知つておけば、語解の大
な力もあり、また興味を持つゆえんでもある。

2. 本文を繰り返し読むこと。「物語り」であるから、そこにおの
ずから調子がある、声を上げて朗々と読むこと。そうして、いるうち
に、その場の情景、内容が分かつてくる。

3. 下欄の「重要語句」、その他自分で意味の分からぬ語句につ
いて、古語辞典を引く。この時、一つの語にいろいろの意味が出て
いるから、その用例と併せて読み、どの意味が適當なのかを決定す
る。

4. 次に全文の逐語訳に入る。

――以上の作業を終わつて、いよいよ設問にかかる。問題は上段
基礎下段完成の二段に分けて配列してある。
まず基礎の問題から始める。もし分からぬところがあつたら、更に
まだ本文を読み取るうえで不十分なところがあつたのだから、更に
はじめにもどつて考え直すこと。
完成はかなり難しい問題も含まれている。
基礎があつて、はじめて完成为あるわけであるから、あちこちやり散らすことなく、順序を追つてしまつて取り組むこ
とが大切である。
この方法を実行することにより、はじめて『源氏物語』の学習が徹
底し、ひいては古典説解に対する大きな自信を養うことになるであ
ろう。